

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第127回演奏会

ショスタコーヴィチ：交響曲第１番ヘ短調 作品10

Dmitri Schostakovich：1. Sinfonie f-moll Op. 10, 1926

第１楽章　Allegretto-Allegro non troppo
第２楽章　Allegro
第３楽章　Lento
第４楽章　Allegro molto

休　憩

ブラームス：交響曲第１番ハ短調 作品68

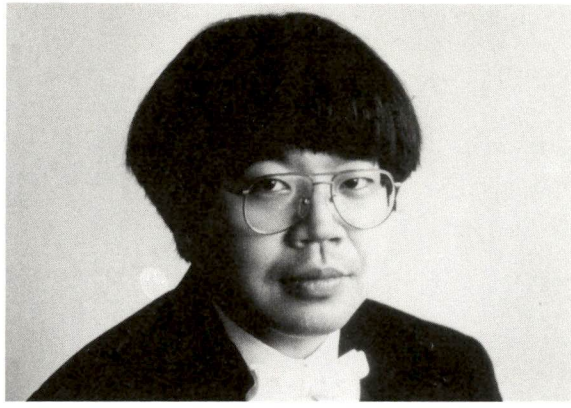
Johannes Brahms：1. Sinfonie c-moll Op. 68, 1876

第１楽章　Un poco sostenuto-Allegro
第２楽章　Andante sostenuto
第３楽章　Un poco allegretto e grazioso
第４楽章　Adagio-Allegro non troppo, ma con brio

1990年４月１日(日)2:00 p.m.
東京文化会館
主催：新交響楽団

指揮者

高関　健



1955年東京生まれ。幼少よりピアノとヴァイオリンを始め、桐朋学園高校音楽科から同大学音楽学部に進む。ヴァイオリンを鷲見三郎、指揮を斎藤秀雄、秋山和慶、小澤征爾、森正の各氏に師事。また76年、来日中のフランコ・フェラーラ氏の指導を受けた。

1977年、カラヤン指揮者コンクール・ジャパンに優勝。78年桐朋学園大学を卒業、８月にカラヤン氏の招待によりベルリン・フィル・オーケストラ・アカデミー（カラヤン財団）に聴講生として留学。79年４月より85年までカラヤン氏の助手としてベルリンフィルの演奏旅行、録音等に参加。81年夏、タングルウッド音楽祭に参加、同音楽祭指揮コースでバーンスタイン、小澤征爾、マズア、プレヴィン、マルケヴィッチの各氏に指導を受ける。

1981年10月ベルゲン交響楽団でヨーロッパ・デビューを飾った。83年、オスロ・フィルの定期演奏会およびベルゲン響に再度客演。同年５月、第７回ニコライ・マルコ記念国際指揮者コンクールで第２位入賞。1984年、ウィーンで開催されたハンス・スワロフスキー国際指揮者コンクールで優勝、一躍注目を集めた。85年１月には日本フィル定期演奏会で日本デビューを飾って高い評価を受け、その後日本各地のオーケストラに客演し、若手指揮者のホープとして活躍している。86年２～３月ヨーロッパ、89年２～３月ヨーロッパ、アメリカの早稲田大学交響楽団演奏旅行に同行。86年４月より90年３月まで広島交響楽団音楽監督・常任指揮者をつとめた。86年ウィーン交響楽団を指揮。現在は名古屋フィル、札幌交響楽団、京都市交響楽団指揮者。

ショスタコーヴィチ：交響曲第１番

楽器編成　ピッコロ１、フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット３（B_b管２、F管１）、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、ドラ、鉄琴、ピアノ、弦５部

かれこれ10年位前のことであろうか、私の友人が新宿の某レコード店に行って、「ショスタコーヴィチの～ありますか？」と尋ねたところ、店員曰く、「ショスコタヴィッチですか？」……という話を聞いて、ふたりで大笑いした記憶がある。それから10年、死後15年が経とうとしている現在では、そんなことはあり得ないだろう。ショスタコーヴィチは、音楽に携わる者にとって知らぬ者のない大作曲家となってしまった。

ショスタコーヴィチの魅力としては、感動的な旋律と叙情性、皮肉とユーモア、激しさと大爆発等があげられるが、今日演奏する第１交響曲はどうであろうか。少し解説してみよう。

この曲は1924～25年、ショスタコーヴィチ18～19歳の年に作曲された。まだ学生時代の作品である。しかしその独創性によってこの曲はたちまち有名となり、海外でトスカニーニ、ワルター等が取り上げるに及んで、ショスタコーヴィチの名はまたたくまに世界中に広まった。

私が感ずるに、ショスタコーヴィチは自らの思想を表明するだけではなく、現時点で自分が持っているあらゆるテクニックを残さず披露しようと考えていたような気がする。その中でも、特にオーケストレーションに関しては、あらゆる楽器の特性をとことん試してみようという姿勢が伺える。そのため気を抜けるパートはひとつもなく、新響にとってはかなり手応えのある曲となっている。例えば、練習中に誰かが難しいソロをやっているのでそちらの方を見てみると、それが２番奏者だったりする。因みにレニングラード・フィルは60年以上も前にこの曲を初演したわけであるから（1926年）、その当時からかなり上手なオーケストラだったに違いない。

なお、ショスタコーヴィチは作品を後になって改訂するのが嫌いであったらしく、本人も「同僚のいかに多くの時間が際限のない改訂に費され、そうでなかったら非常に多くの新作が書かれ得たことを考えるとぞっとする」と語っている。従ってこの交響曲は、19歳の時に書かれたそのままである。

・第１楽章　４拍子の部分と３拍子の部分が交互にあらわれる。テュッティの部分は余りない。途中では弦セクションが19部に分かれて使われている。最後は何となく終わってしまう。

・第２楽章　スケルツォ楽章である。ピアノ独奏が出てくるが、ショスタコーヴィチの交響曲で、これだけピア

ノの目立つ曲は他にない。中間部の民謡風の旋律は、はじめ3拍子で出てくるが、後半には同じリズムなのになぜか4拍子で出てくる。この楽章もまたテュッティが少ない。

・第3楽章　豊富な旋律を持つゆっくりとした楽章。練習番号⑬の弦楽器群の響きは、後年のショスタコーヴィチを彷彿とさせる。

・第4楽章　小太鼓のクレッシェンドが終わった所が第4楽章の始まりである。様々な要素が交代して登場し、室内楽的な部分も多いが、最後はプレストで激しく終わる。途中のティンパニの長い独奏は、やる側からすると少し恥ずかしそうである。　（Perc.　桑形 和宏）

ブラームス：交響曲第1番

楽器編成　フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部

この交響曲は1855年、ブラームスが22歳の時に第1楽章が書き始められたという。しかしこの曲はすぐには完成されず（ある本によるとブラームスの管弦楽に対する経験の乏しさと力量不足からとあるけれど、ブラームスのどこが力量不足なんだろうか、と演奏しながら考えてしまう）。この間に2曲の管弦楽用セレナードと「ハイドンの主題による変奏曲」が書き上げられ、管弦楽を伴奏とする声楽曲も作曲されている。第1楽章はハンブルクで着手され、デュッセルドルフにもどってからもそれを続け、さらにハノーバー、ゲッティンゲンなどで手を加えられて、1862年夏にミュンスターで一応は書きあげられたと伝えられている。友人で音楽家のディートリッヒは1862年夏にこの楽章を確認しているがその時点ではまだ序奏はなかった。その後しばらく間があって、1874年ごろからブラームスは本式にこの交響曲に没頭した。1874年夏にはスイスのチューリヒ湖畔のリュシュリコンで筆をとり、その翌年にはケンブリッジ大学から音楽博士の名誉学位を贈りたいとの手紙を受けとり、称号を貰いにいくのを「私はケンブリッジに急いで出かけることはできるが、そればかりではなく、場合によってはロンドンへも姿をちらちら見せなければならない。……そんな仕事は私には必要でない。なんのために私はそうして2、3週間を無駄に過ごさねばならないのだろう」と言ってやめたほど作曲に専念した（ブラームスは英語がまったくだめだったのもイギリスにいくことをためらわせた理由だったと思う）。そしてブラームスはハイデルベルクの近くのツィーゲルハウゼンで作曲を急ぎ、さらに翌年夏、バルト海のリューゲン島にある海岸の町ザスニッツで筆を加え、1876年の9月に至って、クララの住居のあるバーデン・バーデンの近くのリヒテンタールでやっとこの曲を完成した。

この曲の初演は1876年11月4日に、カールスルーエの宮廷歌劇場で友人のフェリックス・オット・デッソフの指揮で行なわれた。そしてその3日後には、ブラームス自身の指揮によりマンハイムで演奏されている。この交響曲は初演までにかなり修正を施し、例えばデッソフが書きあげられた曲の楽譜をみて第3楽章の再示の部分が省略された形になっているのに反対意見をだしており、ブラームスは素直にその部分をつけ加えている。初演後も出版までの間、何回となく手が加えられた。ウィーンでの演奏会（12月17日）の前に「きわめて美しい繊細さが得られる」というわけで、クラリネットをB管に変えている。カールスルーエで初演された年のうちに、この曲はミュンヘン、ウィーンで演奏されている。翌年はライプツィヒ、ブレスラウ、ケンブリッジ、ロンドンでも演奏された。各公演地での評判はよかったがミュンヘンだけはワーグナーの本拠地ということで他のところよりもよくは受け入れられなかった。

第1楽章　ウン・ポコ・ソステヌートの序奏ではじまる。弦による半音階的な上昇と管による下降の2つの旋律で力強くはじまるこの序奏は、この楽章ばかりでなくて、全曲の統一的要素となっている。序奏がピッチカートで消えると、曲はソナタ形式をとるアレグロの主要部に入り展開部につづく。

第2楽章　アンダンテ・ソステヌート、ホ長調で3部形式をとる。第3部の独奏ヴァイオリンは効果的であり印象深い。

第3楽章　ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラチオーソ。クラリネットの親しみやすいおだやかな旋律ではじまるロマンス風の楽章で3部形式に従う。中間部ではブラームスが好んで用いた動機があらわれる。そのひとつは、「運命の動機」といえるもので管楽器にあらわれる。もうひとつは「死の動機」とも呼ばれるものでこの「運命の動機」に答えるように弦楽器にあらわれる。3度の音程で2回下降する動機である。

第4楽章　ハ短調アダージョの序奏とハ長調アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオの主要部とからなる。序奏の後半は、ピウ・アンダンテ、ハ長調になりホルンによる朗々とした有名な旋律があらわれる。この旋律はクララの誕生日のプレゼントとして1868年に書いた歌からとられた。もっともこの旋律は、アルプスのホルンの旋律に基づくものといわれている。第4楽章の第1主題は、ベートーヴェンの第9交響曲の合唱の主題によく似ているといわれることが多い。第2主題はヴァイオリンで柔和にあらわれ、再示部の後半でホルンの旋律を明るく出しクライマックスに突入する。

（Fg.　野田 俊也）

情報は友だち
RICOH

アートする知能犯。

私は知性と感性をそなえもつ、美の求道者。
見つめ、見つめられ、
シーンの鼓動が感じられるようになったら、
風の色が、街の音が、見えてくるようになる。
そのとき私は、アートする知能犯になる。
つかまえたイメージを、確実に映像にするために——。
リコーの4倍パワーズーム内蔵
高性能コンパクトAF一眼MIRAI。



●35-135㎜、望遠比4倍に迫る高性能パワーズーム内蔵●AF補助光を内蔵したひとクラス上のTTLオートフォーカス●秒2コマのオートワインダー●撮影意図とシチュエーションに応じて自由にシフトできるプログラムAE●撮影前に露出の適・不適を知らせるストロボ調光システム●ディテールに迫れるマクロ機能つき●テレコンバーターをつければ、200㎜の本格望遠に

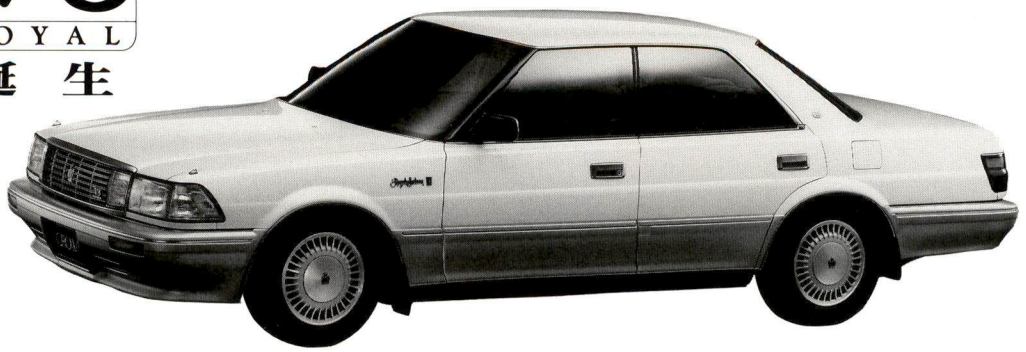
高倍率・高性能コンパクトAF一眼〈ミライ〉

MIRAI

メーカー希望小売価格(税別)
MIRAI本体……73,000円 MIRAI DATE本体……77,500円
株式会社リコー 光学事業部 〒104 東京都中央区銀座6-14-6
(リコー三愛ビル) TEL.03(543)4191

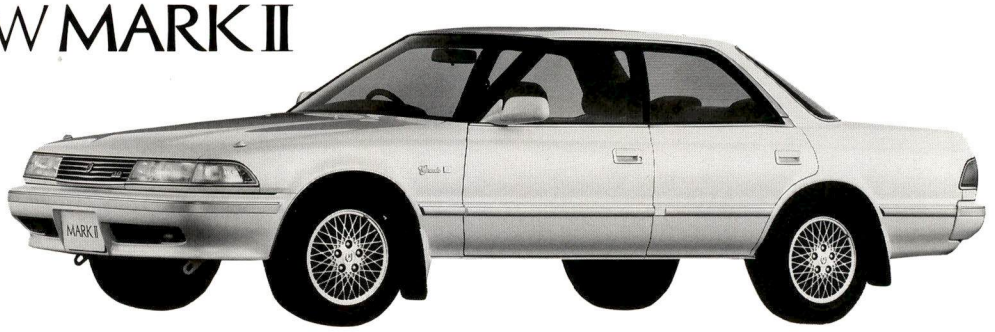
格別の誇りと歓び。
NEW CROWN
V8
ROYAL
誕　生

あなたがお待ちになっていたクラウンです。



大いなる、存在感。マークⅡ3000。

NEW MARKⅡ



取扱車種	●乗用車	●商用車	●トラック	●R.V	●産業車両
	センチュリー	クラウンバン	ダイナ	ランドクルーザー	フォークリフト
	セルシオ	マークⅡバン	ダイナ150	ハイラックス4WD	ショベル
	クラウン	カリーナバン	ハイエース	ハイエースワゴン	ローダー
	ソアラ		ハイラックス	マスターエース	トーイング
	マークⅡ		コースター	サーフ	トラクター
	カリーナED		トヨタ救急車		
	カリーナ				

メトロポリス東京をネットする62拠点

――真心と豊かなカーライフをお届けします――

東京トヨタ

東京都港区三田3-11-34　TEL.03-455-1211(大代)



まもってほしいのは、ハートです。



音楽には著作権があります。人で言うなら、それはハートです。作詩家や作曲家が、夢と感動を美しい〈かたち〉にした音楽——それを健やかに育てるために、JASRACは音楽のハートを大切に、その確かな鼓動を見守りつづけています。

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本 美由起

〒105東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551